

# 百年農家を

## たずねる

生野高校写真部の生徒が松原市の各所を訪ね、その現状や魅力を発信する「まつばら探訪どこIKUNO」。第一回目は、百年にわたる米農家、吉田努さん宅を訪問。農作業を手伝うとお話をお聞きし、その詳細をレポートします。

▼問合せ 秘書広報課(☎334・1550代表)



刈ったばかりの稲の束を持つ吉田努さん

### 初めて経験する米の脱穀

日本人の主食であるお米。しかし、日本人のお米の消費量減少や安価な輸入米などによって、近年そのお米を育てる日本の農家は全国的に減ってきている。松原市ももちろん例外では無い。今回は米農家の吉田さん宅に取材し、松原の地でおよそ70年間にわたってお米を作ってきたとおっしゃる吉田努さんから主にお話を伺った。また私たち生野高等学校写真部のメンバーも、お米の脱穀作業を実際にお手伝いさせてもらった。吉田さんの家は100年続く農家だ。今となってはさまざまな機械を

使って農作業をしているものの、かつては田を耕すのは牛を使い、農作業のすべてを手作業で行っていたそうだ。今でもその当時の道具が現存しており、博物館に展示されているもおかしくはない程、貴重なものらしい。

まず取材を行う前に、農作業がどれほど大変かを知るため、実際に脱穀作業(昔の名残でこの作業を「うすひき」と呼んでいた)の一部をお手伝いさせていただいた。作業は吉田さんの親戚総出で行うのだが、今でもこのように大勢で集まって農作業をしている所はあまり見ないそうだ。脱穀自体は機械ですが、脱穀前のお米を機械に投入したり、脱穀したお米を袋に詰めたりするのは人の手で行う。機械からは、結構速いスピードでお米が出てきて、あっといいう間に下に敷いたゴザに、お米が溢れかえる。そのお米を袋に詰めていく作業をやらせてもらった。重いお米をうまく扱うにはコツが必要で、すぐに腰が痛くなった。

「腕で持ち上げるんじゃなくて、姿勢をまっすぐにして足の力で持ち上げると腰を痛めないよ」とアドバイスをいただいたのだが、慣れない姿勢で上手く動くことができず、結局腰にかなりの負担をかけてしまった。作業場では機械が大きな音を立てて動いているため、会話がほとんど出来ない。指示もよく聞こえなかった

ので、間違ったり、困惑して手が止まったりしてしまった。結果として、私の農作業体験はなんとも不甲斐ない結果に終わってしまった。初めての作業ばかりで簡単には要領を掴めず、しっかりとした戦力になるには経験が必要だと痛感した。

### 人との交流を深め 農業を次世代に残していく

午前中の作業が終わり、お弁当をいただいた後、努さんとその親戚の方も交えて、お話を聞かせていただいた。若い頃からお米を育ててきた努さんは、自身が農家であるからこそ、現在の農業の状況は当然だと思ふとおっしゃった。

「農業人口の減少はある意味当たり前だと思えます。まず、農業機械をそろえようと思えば、かなりお金がかかります。モノによってはちょっとした高級車に匹敵するようなのだっであります。それに、農業の仕事は、単純な時間給で考えると割に合わない仕事です。農業は、日が昇ってから暗くなるまでが仕事時間です。定時に始まって定時に終わるといような時間労働ではありません。だから、時給で計算したらびっくりするような額になるかもしれません。都会では、もっと割のいい仕事がたくさんありますから。また他の人にやっ

てもらおうにしても、私達が持つ知識を言葉で伝えるのはなかなか難しいので、一緒に作業をして経験で伝える必要があります。しかし、これがなかなか難しいのです」

このような現実の中、農業の衰退は避けられない未来なのかもしれない。しかしだからといって農業を絶やしていい訳では無い。今の私たちが毎日当たり前のように食べ物いただくことが出来るのは、農業に携わる方がいてくださるからだ。

「私達がこの仕事を続けられるのは、やりがいと誇りがあるからです。この仕事は経験がものを言いますが、天気や害虫、肥料のことなどは常に頭においてやらないとダメです。難しく言えば、気象学、生物学、地質学などにも長けていなければならな

いと言っている、環境の変化に敏感業をしていると、環境の変化に敏感になります。四季を肌で感じ、自然の恵みに感謝したくなります。そして何よりも、お米や野菜は、愛情を注ぎ丹精こめて育てると、それに応えてくれます。まるで我が子を見ているようで、見ていてとても楽しいのです」

このような気持ちを私達の代で絶やしてもいいのだろうか。大変な作業のその先に、辛さも吹き飛ばすような喜びと達成感があるのだろうか。

「私達は、幸い昔ながらの親戚づきあいがあって、兄弟以上の関係でお互いに支え合い、また下の世代にもその知識を伝えていくことができます。他の家ではなかなか3世代と一緒に農業をできないようです。知識や経験の受け継ぎがこまめに行われないと、農業は続いていきません」

そういえば、僕がさつきやった腰の痛い作業を、小学生くらいの男子も一緒にやっていたことを思い出した。人と人との交流を深めることが農業問題の解決に近づくことと吉田さんは考える。交流が大切なのは農業に限った話ではない。我々も今一度、人との繋がりの大切さを考え直してみることがあると感じさせられた1日になった。



生野高等学校

写真部2年 杉浦 健太郎  
写真部1年 鈴木 隆司

1作業小屋の中 2稲の束をワラでくる方法を教わる生徒(鈴木君)  
3唐箕(とうみ)で籾殻を飛ばしてみる(100年近く昔のものらしい。今でも動くのがスゴイ) 4若い世代も作業を手伝う 5昔使っていた牛専用のわらじ 6千歯こきで籾を外してみる